解除

作　広田淳一

【表記について】

【★】 黒星。前の人物の台詞の語尾に重ねて言う。 ※いわゆる食い気味。

【☆】 白星。近くにある同じ数のこの印の付いた台詞が同時に発話される。意味上は無関係。
※舞台上に複数の会話が存在する場面で使用する。「同時」の厳密性には拘らない。

【／】 スラッシュ。台詞中で使用される。間髪入れずに台詞の調子・方向性を切り替える。

【＝】 イコール。
【使用1】語尾に「＝」が付き、続く行の語頭に「＝」が付く場合、間髪入れずに次の台詞が始まる。
【使用2】語尾に「＝」が付き、行（他者の台詞）をまたいで語頭に「＝」が付く場合、それらは連続した発言である。 ※ある人物の台詞の間に挿入される他者の発言、あいづち等を待たずに話し続けろ、という意味。「無視せよ」という意味ではない。音声の被りが発生する。

【〔〕 大カッコ。近くにある同数のこの記号と同時のタイミングで始まり、音声が被ったまま発話される。

【▲】 黒三角。会話しながら退場する。

【△】 白三角。会話しながら登場する。

【登場人物】

佳山（飯田）弘樹　…三十代中盤。心乃美の夫。婿養子。貧困家庭で育った冷徹なビジネスマンであり勝利至上主義。功利主義の信奉者であってジェレミー・ベンサムを尊敬しており、リバタリアン。純粋に経営的な観点からポリティカル・コレクトネスとケアの論理にも精通しており、そこに商機を見出している。

佳山心乃美　…二十代中盤。次女。弘樹の妻。フィクトセクシャル。夫婦の関係は偽装結婚的とも言えるが、相互に敬意は持っており、ある種の好意を持っている。漫画作品（『異端プロディイジーズ』）の登場人物としてのイケメン化した「クルト・ゲーデル」を愛している。家族には「病気」と思われているが、本人はセクシャリティの問題だと思っている。ただ、かつてマイノリティ運動に関わって面倒事に巻き込まれて以来、あらゆる運動から撤退している。

佳山愛華　…三十代前半。長女。独身。おじいちゃん子。祖父・秀雄との繋がりが一番濃い。秀雄の店を継いでいる。

佳山秀雄（祖父）焼肉チェーン・肉汁大百科創業者。

佳山直樹（父）代替肉、培養肉主義者。今は飲食業から足を洗い、性風俗関係の仕事をしている。秀雄との中は複雑で愛憎入り交じっており、直樹は父を恨んでいる。

【1】食後の休憩

○心乃美の独白　その1

心乃美、登場。二十代中盤から後半の女性で物静かで、柔らかい印象。
なにやらヘトヘトの様子である。

心乃美　（独り言のように）最悪だ。――いや、最悪じゃないか。――マシ。マシだった。かなり・むしろ。――（小さい身振り）大きく、見れば。――よかった。ってことにしておこう。せっかくだから。うん。よし。大丈夫。

心乃美、気を取り直して。

心乃美　（紙を取り出してそれを見つつ観客に、やや早口で）――本日は、ご来場くださいまして誠にありがとうございます（頭を下げる）。――本公演、途中休憩等はございません。体調が悪くなられた場合などにはその場で手を上げてお待ちください。係の者がご案内させていただきます。また、非常の際にも係の者が誘導いたしますので、どうぞお席についてそのままお待ちくださいますようお願い申し上げます。

言い終わって紙をしまう。
やはりヘトヘトの様子である。なんとかテンションを上げ、気力を振り絞って話し出す。
以下、決して独り言ではない。

心乃美　（観客に）揉める。――こう、人と、揉めるのが嫌いでして。嫌い？　というか苦手、でして。――なるべくなら誰とも揉めたくないというか。そう思っているんですいつも。――でも無理で。――すぐに揉めてしまって。――家族。家族がですね、すごくそういう揉め事を起こしやすいというか、お互い、譲れないことが多い人たちなんですよ。だから、小さい頃からずっと揉めて来てて。――お姉ちゃんとか。――おじいちゃん・おばあちゃんとか。お父さんとか。お母さん、――は、お母さんだけは唯一、揉めない感じの、――やさしい、丸い感じの人だったんですけど、でも、どっか行っちゃって、それっきり。――もう長いこと会ってないですし連絡もしてないんで、正直・今、どうしてるとかも全然わからないぐらいの感じなんですけど。（自分の陰鬱さに気づき驚いて）あー、暗！　（笑う）なんでしょうね？　この、暗い感じ。良くないですね、これは。あー、ちょっと。ほっ、ほっ、はっ。

などと声を掛けながら体を動かし、ジャンプをして元気を出す。

心乃美　暗いときは、やっぱジャンプですよねー。いや、これはふざけてるわけじゃなくて、まあ、ふざけてもいるんですけど、だって、十回思いっきりジャンプしたあとでまだ続く暗さ

なんてあります？　――無いんですよ！　いや、あったとしても、あったとしてもですよ、暗さのピークみたいのはジャンプで峠越えてしまってるというか、あの、私、――高校受験失敗してて、第一志望の女子高に落ちたんですけどそん時もこうやってジャンプして乗り切ったんですね（ジャンプ）。――今にして思えばあんないい学校・私が入れるわけないんですけど、当時はなんか調子乗って受験して・案の定落ちて、そんで落ち込んで。いや、「落ち込んでる」ってこと自体うぬぼれんのも大概にしとけって話なんですけど、だから――ジャンプして。（数回ジャンプ）――もう、あれですよ。お寺の。お寺、で、お坊さんがなんか、千日回峰行とかやってるのテレビで見て思いついたんですけど。あ、修行しよ、みたいな？　だからジャンプして。――そしたらなんか、疲れたな、って思って。しんどいな、ってなって。

ちょっと疲れている時間。

心乃美　ジャンプする前は高校落ちたオワター、っていう気持ち十割だったのが、ジャンプのあとには九割ぐらいにはなってるんですよ。一割こう、「ジャンプしんどい」に化けてますから。持ってかれてますからそっちに。で、――しばらくしてまた暗くなっちゃって、――ジャンプのしんどさ忘れて「高校落ちたオワタ」になってきちゃったら、また飛ぶんですよ。千日回峰行ですから。（ジャンプ）――なんていうんですかね、自分に罰を与えるがごとく、暗くなってきたらジャンプ。暗くなってきたらジャンプ。暗くなってきたらジャンプ！（ジャンプ）

一拍。

心乃美　ということをやっているとですね。だんだんとこう、――ジャンプ嫌だな・と。飛ぶのしんどいな・と。バカらしいし。あと、無意味。意味、が、ない。お金、など、も、儲かりはしない。それに自分の・あの、――全力のジャンプの到達点の低さとかが、滑稽ですからね・もはや。そうすると今度、本能が言い訳しだすわけですよ。ジャンプしたくないなー、っていう理由で、強制的に明るくなる。「いや、暗くなってないし！　全然明るいし！　したがってジャンプする必要などないし！　なぜならば落ち込んでないし！」って、――いう感じに、――なって。だから、――ジャンプしてりゃあ、なんとか、なる。自分のことだったら大概、これでいける。

と、佳山弘樹、登場。三十代中盤の男で、ドレッシーな服を着ている。

弘樹、舞台上の椅子に座る。

心乃美　（観客に対して弘樹を示し）あ、この人。これ、あの、旦那です、あたしの。――旦那です、っていうのも、――ねえ？　なんかもっとしっくり来る呼び方ないんか、って思うんですけど。こんな使用頻度高い言葉なのにいい感じの言葉が、ない。――夫っていうのも、相方、相棒、パートナーっていうのも、ましてや主人、なんていうのもなんか、おままごと感が

拭えないというか？　もしかするとこれは、言葉の問題じゃなくてあたしの問題なのかもしれないんですけど・とにかく、――（弘樹を示し）この、この人、が旦那さん。夫さん、的な。人で。私が世界で一番愛している、推している人、は、もちろん・この人とは別に存在しているんですけど、――ゲーデルさん、その、ゲーデルさんのことも含めて認めてくれているというか。――理解してくれているというか。だから・まあ、いい人です。とっても。

心乃美、弘樹を見て、のち、

心乃美　揉めますけどね、このあと。や・あたしとじゃないですよ。あたしとは揉めないんですけど、よく揉めてます。でも、いい人です基本。――いや、応用も。基本も応用もいい人ですうちの旦那、うちの夫、うちの社長さん、は。社長さん。――そう、社長なんですよ、今、うちの会社の。うちの会社っていっても別に私が何かしたってわけじゃなくて、私の、おじいちゃんが作った会社っていうだけなんですけど、まあ、親族経営っていうんですか？　そういうので、私の夫さんが婿養子になって、今は社長さんになっていて。――っていう。まあ、もちろん、お姉ちゃんとか、お父さんとかは・じゃあ、どうなってんの？　っていう話があるんで、それでだから、そう！　家族。家族がね。うちの家族は揉め事を起こしやすいっていう話なんですよ。そうなんです。いつでも。揉めてばっかりでして・でもあの、私は別に、

一拍。

心乃美　揉めるよりは揉めない方が良い、って思ってるわけじゃなくて。そういう、平和主義とかではなくて。単に面倒くさいというか。どうでもいいというか・興味が持続しないというか。本当にもう、揉めてしまっていると、（身振り）わー、ってなっちゃって、どうでもいい、と思うことが多いので。フフフ。――だから思うんですよ。こんなどうでもいいことで揉めている人達はじつにくだらない！　なんて、ね、――思っている自分の方こそ、じつは、本当にくだらない、どうしようもない人間なのかもしれないなァ、って。そういう反省もあったりして。ははは。すみません、まとまらなくて。

一拍。
小さく一回、ジャンプ。

心乃美　（気を取り直して強く）何が言いたいかというとですね・だから、――揉める人たちが悪いわけじゃないと。多分、揉める側の人たちは、どうでもいい、と思えないことがたくさんあって、譲れない、大切なものがたくさんあって、だからこそ揉めている。――という場合もあるわけです。しかも、――ちゃんと話せばわかってもらえるのでは？　とか、思っちゃってる程度には、他人のことを信じてもいるわけで。無邪気にも。――もちろんそれは単に感情がコントロールできないからであったり、ということもあると思うんですけど。でも、――うちの揉め事はいつも、それなりに重要な話をしていたような気もしていて／そうなんですよ！

だから、この日の家族の揉め事もきっと、――決してどうでもいいことなんかではなくて。むしろ、かなり重要な、大切な話だからこそ揉めたのかな、と。――はい。今は、そう、思うことにしているんです。私は。

弘樹　心乃美さん。

心乃美　はい・はい・はい。なんでしょう。

○弘樹と心乃美

郊外にある閉店後のレストラン。

佳山弘樹と佳山愛華がいる。ふたりは、食後である。

テーブルの上には重ねられた食器と、ふたりのグラス。

割りと距離のある話しぶりをする夫婦関係だ。ただし、上下関係などはそこにはなく、対等な関係性の中で、遠い。それは険悪ということではなくて、単にお互いを尊重して、あるいは、初めからお互いに対してそれほど興味が無いことを理解し合っているために、遠い。したがってその遠さにはある種の温かみすらある。

弘樹　まだ、なの、かね。お姉さん？

心乃美　ああ、（同意して）ねえ？　もう大分遅くなってるみたいで。

弘樹　――食べ終わっちゃった、どころじゃないしねえ。

間。

弘樹　トラブルじゃなかったらいいんだけど、

心乃美　ねえ、ホントに。

弘樹　なんか、事故とか。

心乃美　や、そんなことは（無いと思うけど）。ただ、遅れてるだけじゃない？

弘樹　「ただ、遅れてる」って言ったって五時間だからね。午後六時待ち合わせだったはずがもうじき十一時になろうとしているわけだからね。

心乃美　――怒った？＝

弘樹　＝いや、怒ってはいないよ。むしろ愛華さんからしたらなんで待ってんだよ、ってね。五時間待ってる方もそれはそれで・そろそろ暴力だろ、ってそういう気分なんじゃないかな？

心乃美　――暴力なの？　ただ、待っていることが？

弘樹　いや、ある種のね。五時間待つことの暴力性もあるというか。

心乃美　わかんないけどねえ。お姉ちゃんが、どういう気分かっていうのは。

弘樹　（お姉さんは）なんて言ってるの？

心乃美　や、もう、すぐ着くって。

弘樹　ずっとそう言ってんじゃない。

心乃美　（同意して）ねえー。
弘樹　少なくとも三時間ぐらい前からは、もうすぐ、すぐ着く、ホントすぐって。
心乃美　――怒った？
弘樹　いや、怒ってはいないけれどもさ。

間。

心乃美　でも、今日のあの、さっき食べたメインの、
弘樹　ん？　メイン、ああ、鴨の。コンフィ。
心乃美　ああ。鴨の？　コンフィ？　美味しかったねえ。なんかこう、ねっとりして。
弘樹　ねっとりってなによ（笑）
心乃美　や、だから、濃厚？　それでいてさっぱりしているというか？
弘樹　――（楽しそうに）なに・なに・なに？
心乃美　しっかりした味わいにも関わらず、それでいてクドくないというか？
弘樹　ああ、食レポしてくれるの？
心乃美　あれ、は、え？　大豆で作ったやつ？
弘樹　いや、違う。あれは、培養肉。
心乃美　培養肉。ああ、ということは、つまり、あの――？
弘樹　クリーン・ミートであって、フェイク・ミートじゃないというか。
心乃美　（よくわからないが）あー。はいはい。クリーンな、ね。クリーン、クリーンな方の、
弘樹　だから植物性タンパクの、――要するに大豆で作った「鴨っぽい肉」じゃなくて＝
心乃美　＝っぽい肉じゃなくて？
弘樹　鴨の細胞から培養して作った、動物性タンパクの、本物の肉、というか。
心乃美　だから、あれだよね？　プラント・ベースド・ミートじゃなくて、クリーン・ミートの鴨っていうか？
弘樹　そうそう、そういうこと。（冗談っぽく突っ込んで）ちょっと・ちょっとー（そんな基礎的なことを今更間違えるなよー）
心乃美　わかってるって。大丈夫！　え、でも、じゃあさ、――区別、とか、つくんですか、
弘樹さんは？　本物と、培養肉と？
弘樹　――味で？
心乃美　味で味で。
弘樹　（笑）つくわけ無いでしょ。だって実質・同じものなんだから、細胞レベルでさ。
心乃美　ああ、だよね・だよね。実質ね。
弘樹　そりゃ部位によってはまだ３Ｄプリンターでの再現じゃあ、――なんだ。歯ごたえとか食感なんかが追いつかないとこもあるみたいだけど、まあ、調理しちゃえば、ね。
心乃美　うん。区別がつかないよね。もはや。

弘樹　ブラインド・テストでもどんどん差がなくなってるっていうし、しかも、プロを対象としたやつでだよ？
心乃美　あー。そりゃ素人にはもはやわからんね。

一拍。

弘樹　（しみじみ）ホント興味無いよねえ。
心乃美　あるある。あるってばよ。
弘樹　素人ではないでしょ？　一応、焼肉屋の娘でしょうが。
心乃美　でも、――好きじゃなかったし。焼肉。
弘樹　とはいえ、さ？　お肉を売って稼いだお金で育ってきたわけでしょ？
心乃美　そう、だね。まあ、お肉で育ってきた。実質。――まあ、あんま食べてはないけど。
弘樹　でも、全く食べてこなかったってわけではない？
心乃美　そりゃ、ちょっとはね。ヴィーガンとかじゃなかったしうちは。
弘樹　（嘲って）ヴィーガン（笑）　ってわけには行かないだろうね。焼肉屋がヴィーガンってことにはなかなか、ね。

間。

心乃美　子供の頃は全部本物のお肉だったからなあ。牛も豚も。――鶏もも肉も＝
弘樹　＝なんで鶏だけ、もも限定？
心乃美　や・好きだから。もも肉。
弘樹　ああ、――そう。
心乃美　やっぱもも肉だよ。
弘樹　だけどもう、そんなダーティな肉を食べていい時代は終わったのよ。
心乃美　でも、まだ法律違反っていうわけじゃないでしょう？
弘樹　海外じゃ違法になってる国も珍しくない。時間の問題だよ、この国だって。

間。

心乃美　（店内を見渡し）なんかヘンな感じするね。――店員さんが誰もいないレストラン？
弘樹　――そうね。閑散として。
心乃美　まさかこんなにすべてがさ、――あーっ、という間に入れ替わっていくとは思わなかったよね。
弘樹　むしろそのお陰でうちは儲かってるわけだけどね。
心乃美　まあまあ、そうですけど。
弘樹　オール・クリーン・ミートの焼肉チェーンってのは、うちが初めてだからね。
心乃美　でも、ここはフランス料理でしょ？

弘樹　新業態をね、だから。
心乃美　ああ、新業態。手広くやってくわけだ。
弘樹　次はなんの規制が来るかわかんないんだから、ね。手広くやっとかないと。
心乃美　そうね・そうね。うーん。経営だねえ。

一拍。

弘樹　ダメよ、あんまりそういうこと言ってちゃ。
心乃美　ん？　なにが？
弘樹　ダーティな肉が懐かしい、みたいな話はさ。
心乃美　――ですよね。すみませーん。
弘樹　まあ、そんな野蛮なことが許されてる時代に育ったんだから、しょうがないとは思うけど。

一拍。

心乃美　自分だって食べてるじゃん、お肉。［本当はさ。
弘樹　［ちょっ、止めて止めて！　一応、生まれてこの方、「穢れた肉」は食べてないことになってるから。
心乃美　商売上はね。
弘樹　笑い事じゃないから・それ。そんなん言ってたら秀雄会長と一緒になっちゃうでしょ。
心乃美　そっか。秀雄会長と。――んー、なんか、ごめん。
弘樹　いやいや、謝れってことじゃないんだけどね。まったく、そういうんじゃないんだけど、
心乃美　あんまり揉めない感じでね、今日は。
弘樹　――んん？
心乃美　（立ち上がって距離を取り）揉めない感じで。よろしくお願いします。
弘樹　愛華さんと？
心乃美　それ以外ないでしょ。
弘樹　や、まあ、そう、ですけど。――そんな別に、こっちはだって、愛華さんと揉める理由はないですし。
心乃美　や・でも、そんな簡単には納得しないから。なんたって今日はおじいちゃんの代理で来るわけだからさ。お姉ちゃん本人は別に、会社ん中で大した権限を持っていないとは言ったってさ。
弘樹　★わかってます・わかってます。はい。なるべく穏便に済ませるようには。

心乃美、席に着く。

弘樹　それはまあ、向こう次第、という部分もね。あるかとは思うんですけど。
心乃美　や・だから、なるべくね。
弘樹　はい。

間。

心乃美　こないだ小説でさ、『人のセックスを笑うな』っていうのを読んだんだけどさ、『人のセックスを笑うな』？
弘樹　そうそう！　もうタイトルがいいよね、なんか。
心乃美　みんなそれぞれ、性癖には事情があるじゃないか、っていう？＝
弘樹　＝違う違う違う、そういう意味じゃなくて、あれは。
心乃美　あー、そう、なの？
弘樹　だって、お笑いの定石としてさ＝
心乃美　＝お笑いの定石？
弘樹　そう、笑うな、ってことはだよ？　笑うな、っていうことはだから、「笑ってはいけない」っていうことだからね。
心乃美　あー、つまりその、――押すなよ押すなよ、みたいな？
弘樹　そうそう。フリだからね、あれは。
心乃美　え？　じゃあ、なに？　人のセックスを笑うな、っていうことは、つまり――？
弘樹　そう・だから、――笑うな、っていうことだよ。

ふたり、厳しい顔をしてにらみ合い、やがて笑う。
愛華、登場。ふたりは愛華に気づかない。
弘樹、心乃美、いったん収まって、もう一回笑い合う。

愛華　――気持ち悪い。
心乃美　（驚愕して）ああ、お姉ちゃん。

○三人

愛華はパンツスタイル。ややカジュアルな服装だが、決して安っぽくはない。中型のビジネスバッグを持っており、中には書類が入っている。強い女、という印象が出るといい。自立した女。その印象が心乃美との対称を生むようにしたい。

愛華　なに？　なにをそんな、ヘラヘラして。
心乃美　や・もう、全然来ないから心配しちゃったよ。
愛華　ああ、ごめんごめん。すぐ近くまで来てたんだけどすっごい渋滞に巻き込まれちゃって、

心乃美　（やや不審げに）ああ、渋滞――。
愛華　（弘樹に）ホントすみませんでした。（心乃美にも）事故渋滞でなに、片側交互通行（カタコー）みたいになっちゃってたんだけどさ、警備員のおっさんが明日老衰で死ぬんじゃねえか、っていうぐらいヨボヨボで話になんなくて。
心乃美　なるほどねー。それで五時間も、
弘樹　★いやいやいや、それは困りましたね。本当に。
愛華　このまま車中泊すんのかと思ったもん。ホント・一ミリも動かなくなっちゃって。
心乃美　（席を立ち）あー、なんか、食べる？　料理あるよ、もう冷めちゃったけど。
愛華　★要らない・要らない。お腹空いてないし。
心乃美　え、でも、ずっと車だったんでしょ？
愛華　や、いい、いい。そういう、クリーンなものはあんまり食べ慣れてないからさ。ハハハ。

弘樹、愛華の冗談に棘を感じ取って気を引き締める。
愛華、少し前の台詞あたりから、すでに書類を取り出しつつ、

愛華　えーと、そんじゃ早速始めましょうか。いいですかね？　弘樹さんも。
弘樹　もちろん。お待ちしてましたんで、こっちはもう。

愛華、一息つく。

愛華　（心乃美に）あ、お水だけもらってもいっかな？　心乃美ちゃん。
心乃美　ああ、ごめんなさい。（ふざけて）ただいま、用意いたしますー、
弘樹　ああ、良かったらシャンパーニュなんかもありますよ、さっき開けたクリュッグのロゼ、もちろん、ノンアルコールのやつが。
愛華　――（皮肉な調子で）お水をいただけましたらそれで。
心乃美　うんうん。水がやっぱり一番、ね。

心乃美、水を取りにいくため、退場。
愛華、煙草を取り出す。

愛華　（探す様子で）灰皿――？
弘樹　（驚いて）いや、まさかまさか（禁煙に決まってんだろ）！
愛華　フフ。「いいわけねーだろ」って、ねえ？
弘樹　――（からかわれていることに気づき）勘弁してくださいよ。

やや緊張感のある、長い間。

弘樹、愛華、しゃべらない。
心乃美、コップと水を持って帰ってくる。
心乃美　はーい。おまたせしましたー。
愛華　ありがとね。
心乃美も席につき。
愛華　メール拝見させてもらいまして。
弘樹　はい。ありがとうございます。
愛華　んーとだから、要するにお店の名前を変えたい、と。
弘樹　そうですね。――今日日、「肉汁大百科」でもねえだろう、と。併せて法人名も変更してこれまでの企業イメージ、カンパニー・ポリシーそのものを一新したい・と。
愛華　それはやっぱり、――あれ？　じいちゃんがあんだけ叩かれちゃってるし、――ってことがあるわけだよね？　炎上して、叩かれちゃったし、っていう。
弘樹、身を正して慎重に話し出す。
弘樹　もちろん今回の、――秀雄会長の騒動が影響していないとは言いませんけれども、まあ、売上にも大分・影響が出てきてしまってますし＝
愛華　＝みたいだねえ、
弘樹　ただまあ、もちろん秀雄会長の今回の件だけではなくてですね＝
愛華　＝いや、確かにあれはじいちゃんが悪いよ。うん。――不用意だった。そりゃあ、こんな時代に堂々と「ガチ肉サイコー」なんて言ってたら、ねえ？　叩かれるのは当然だよ。
弘樹　――ですかね。まあ、その程度の失言で済んでいればまだしもだったんですが＝
愛華　＝でも、あの記事はハメられたんだよ。悪いとこばっか勝手に切り取られて、編集されて
弘樹　しかし、――事実としてダーティ・ミートを全肯定するような動画が流れてしまっているわけですから、
愛華　そりゃあね。知りませんとはいかないのはわかるけど＝
弘樹　ええ。
愛華　＝だけど、うーん。そもそも、ダーティ・ミートって言葉がもう悪意剥き出しじゃん。
弘樹　悪意？　――と、いいますと。
愛華　だから、培養肉とか代替肉とかがクリーンで、正しい、善良なお肉であって、本物の、ガチの肉の方は、ダーティで、穢れた、悪魔の肉だ、みたいな考え方なわけでしょう？
一拍。

弘樹　愛華さん、さすがにその議論を今更蒸し返してもしょうがないじゃないですか？
愛華　でも納得はいってないわけよ、未だに＝
弘樹　＝や、だって＝
愛華　＝古い人間なのかもしれないけどね、でも、さ。
弘樹　――流れじゃないですかそういう、時代の。
愛華　じゃあ、なに？　あんたは本当に培養肉が一番おいしいと思っているわけ？
弘樹　んー、個人的にですか？
愛華　そう、個人的に。どうなの？
弘樹　――年々品質は上がってきていますし、もはや見分けがつかないレベルにまで達しているとは思いますよ＝
愛華　＝ホントにィ？＝
弘樹　＝や・ホントですよ。――ちょうどそんな話をさっき心乃美さんと、
心乃美　ねえ。そうそう。そんな話を。
愛華　いやいやいや、でも結局、一番おいしいのはガチ肉でしょ？　それは間違いないでしょ？
弘樹　――まあ、仮にそうだとしたらなんなんです？
愛華　一番おいしいと思う食材を使わないでどうすんの？　って。
弘樹　――んー、それは。――え、ガチ肉の時代に戻そうとおっしゃるわけですか？
愛華　まさか。さすがにそれが無理ってことぐらいは理解させられてますよ。
弘樹　じゃあ、――ああ、そうですか。そしたら、まあ、――どうしようと？
愛華　あんたらこそここで全面的に謝って？　すんませーん、なんつって謝罪しまくってたらさ、こっから先どのツラ下げて続けていくつもりなわけ？
弘樹　んー、どのツラ？
愛華　要するに今、炎上していることの本質はさ、ここまでの誤魔化しのツケが回って来たってことでしょう？　世間様的には、そもそもガチ肉なんかで商売してんじゃねえよ、って話なわけだから。
弘樹　そう、――かもしれませんね、それは。
愛華　動物を変な檻に閉じ込めて動けないようにして、ベルトコンベアーに乗せて大量殺戮して、――そんな残虐行為をするやつらは人間じゃねえ、だから、人間以下のこと散々やってきた人間が偉そうに会社の経営なんかやってんじゃねえぞ、ってそこが炎上の本質なわけでしょう？
弘樹　まあ、大枠については、おっしゃる通りだと思います。
愛華　いや、だとしたら、さ。問題は妥協の仕方なわけじゃん？
弘樹　妥協の仕方？
愛華　そりゃ完全にシロってことではないわけじゃん？　こちとらずっとガチ肉で商売して食ってきたわけだから。やれることっつったら妥協しかないわけでしょ？
弘樹　ああ、なるほど。妥協、そうですね。

愛華　まあ、確かにね。――はい、世相が変わりました。会社の方針も変えました。いえいえ、私たちはそんな残虐なことはやりません。当たり前じゃないですかァ？　みたいなツラして、ここまで誤魔化してきた。知らんぷりを決め込んできた。

弘樹　そうですね。まあ、そのように進化、適応してきたわけです。

愛華　フフ。まあ、進化でも適応でもいいけどさ、それが表面的なウソっぱちだってことはあたしらだってよーくわかってたわけじゃない？　じいちゃんからしてみれば、何を今更、おかしなことを、って話なわけよ。

弘樹　まあ、――会長の心情としてはそうかもしれませんね。

愛華　本当のこといったらだよ？　今の社会の中核を担っている連中なんて、大概、ガチ肉全盛の時代に育ってきてるわけだからさ、「わーい今日はハンバーグだー」「焼肉だー」なんていう子供時代を過ごしてきたわけじゃない？　そういうのを全部・無かったことにして、本当はいつも牛さんがかわいそうで涙が止まりませんでした、みたいなウソをつきまくってるわけでしょ、みんなして。

弘樹　んー、そういった態度そのものがつまり、――嘘っぱちだと？

愛華　当たり前でしょ。や・むしろ嘘っぱちじゃないわけ、それが？

弘樹　や、んー、だから改心したというか、反省の上で再出発をした、とも言えるわけで、

愛華　ハイハイハイ、そんで「反省」したやつの方が「正しい」ってことになって、じいちゃんみたいな古ーい意見は思いっきりぶっ叩かれるわけでしょう？

弘樹　――ご不満はわかりますよ。まあ、ね。確かに「涙が止まりません」とかいって本当に止まらなかったやつ見たことないですからね。いや、むしろ、一滴も涙なんか流していないやつに限って「涙が止まりません」なんて言ってたりする。それはまあ、普通に考えておかしいですよ。

愛華　納得いかないわけよ。それでそういう連中が好き放題にじいちゃんの発言を叩いてるわけでしょ？

弘樹　そうですね。――ご批判を寄せてくださっている方々も、我々も、どちらもお互いにウソまみれ。それは確かだとは思います＝

愛華　＝でしょ？　そしたらなんでうちらだけが謝んなきゃいけないのって！

一拍。

弘樹　確かに、自分の過去をまっとうに引き受けている秀雄会長のような人間のことを、涙が止まらない種類の人間が否定する、それは、おかしな話です。そこに関しては私も同意しますよ。

愛華　ああ、そう？　助かるわ。それだと。

弘樹　（立ち上がり）ひとまず、――整理させてもらってもいいですかね？　ちょこちょこいろんな論点で議論していると、ねえ？　まとまりがつかないと申しますか、

愛華　時間かかってしょうがねえ、って？

弘樹　――まあ、時間もかかってはしまうでしょうし＝

愛華　＝（素早く）そんじゃどうぞ。

間。

○佳山家と肉汁大百科の来歴

※弘樹、ここからは少しプレゼン感を強めに出すか？　パペット人形などを使う？

弘樹　そもそも遡って考えてみますに、――我々の会社は秀雄会長がたった一人で始めた焼肉屋にその原点があるわけです。安くて、おいしい肉を、お腹いっぱい食べてもらいたい、と、そういうシンプルな思いが我が社の魂に、エートスになって、現在まで引き継がれて来たわけです。

愛華　そうねえ。

弘樹　ただ、時代は変わりました。――急激な人口増加と環境破壊の問題、つまり、サステナビリティの観点からエネルギー・コストの大きい畜産業全体に疑問符が突きつけられ、と同時に、動物倫理の観点からも劣悪な環境下での飼育などもはや許されない、そういった「道徳」が問われる時代になって来たわけです。もちろん、フード・テックの急速な発展という技術面の事情がそれに加わって、新しいビジネスとしての代替肉、培養肉の市場を巡る争いが始まった。そういった状況の中で従来の肉食文化は急速な変化を迫られてきたわけです。

愛華　あのー、整理してくれるのはいいんだけどさ、――え？　この調子だと明日の朝までかかっちゃいそうなんだけど、

心乃美　まあ・まあ・まあ、もう少し聞いてあげて、

弘樹　我々も五時間待ったわけですからね。朝を迎えるんなら半分は愛華さんの自己責任と申しますか、

心乃美　★（弘樹を止め）いやいやいやいや、（心乃美に）まあ、ね。あんまり長くならないように、簡潔に話しますんで。（弘樹に）ね、ねえ？

弘樹　――それじゃあ、なるべく手短に。

心乃美　（愛華に）というわけで、ね、もう少しだけ。

愛華　いや、別に聞くけどさ。そんで、なに？

弘樹　えー、そういったわけでですね、――焼肉屋を取り巻く急激な環境の変化というものが不可避的に生じてきた。

愛華　はいはい、そこまではいいとして？

弘樹　幸いにして、我が社はそのような急激な変化に対して非常にうまく適応していくことが出来たわけです。もちろんそういったことの背景にはいち早く培養肉焼肉という業態に着目し、取り組んできたお父様・直樹さんの功績というものが非常に大きかったわけですが、お陰様で我が社はクリーン・ミートによる、培養肉焼肉というジャンルにおいては、業界の先頭を切るような立場を築いてこれたわけです。

愛華　そうねえ。その功労者を追放してしまって、――ということではあるけどね。功績だけをうまいこと横取りして。
弘樹　まあ、お父様のことについてはいったん置いておきましょう。それはそれで長い話になってしまいますし、
愛華　だろうね。ごめんごめん、そんで・そんで？
弘樹　――えー、いずにせよ、業界をリードするような立場に我が社はあるわけです＝
愛華　はい。
弘樹　＝そういった立場であるにも拘わらず、今回、――秀雄会長のご発言によって炎上騒動が起こされてしまった。では、秀雄会長のご発言のなにがそんなにマズかったのか？　なにが問題の本質なのか？
愛華　うん。なにが、問題なんでしょう？
弘樹　私は大きくわけて二点、許容しかねる点があったと考えています。

一拍。

弘樹　ひとつには秀雄会長がおっしゃった「ガチ肉サイコー」やっぱりガチ肉が一番おいしいんだ、という主張。そして二点目に、ガチ肉の店を今後とも続けていくつもりだ、という主張。もっとも悪質な部分としては、えーと、そう（メモを読む）「そうそう、コーラにだって昔はコケインが入っていたわけだしね。だからこそ中毒性があったわけだよ（笑）　それと一緒でさ、ガチ肉のおいしさを知らない世代にも一回食べさせちゃえば、もう中毒になって止められなくなると思うんだよね」。ハイ、アウトー。これがインタヴューにおいてもっとも取り返しのつかない失言であったと考えています。宗教的な、ハラールなどの観点から見ても弁解の余地が一切、無い。
愛華　だからそれはハメられたんだよ。インタヴュアーがなんか悪いフリをしてきてさ、もちろん乗せられちゃったじいちゃんも悪いのかもしれないけど、
弘樹　まずは一点目から行きましょうか。――ガチ肉サイコー、という主張についてです。これは、どんな培養肉でも結局ガチ肉にはかなわない、ということをおっしゃったわけですが、
愛華　そりゃ、事実だからね。
弘樹　仮に事実だとしても、これはどうしても避けなければいけない発言でした。というのも、言ってはいけない事実というものがあるからです、フード業界には。
愛華　なにそれ？　言ってはいけない？
弘樹　現代においてダーティ・ミートはもはや、存在そのものがタブーです。それは倫理的に許されない。非常に重大な、道徳的な問題を孕んでいるからです。
愛華　そんなことといったってさあ。
弘樹　なぜ、未だに動物を殺してその肉を喰う、なんてことが許されると思っているのか？　なぜ、動物を苦しめてもいいと思っているのか？　そこが問題になっているわけです。
愛華　いや、なるべく苦しまないようにシメてるって。

弘樹　おお、なんてことを――。じゃあ、愛華さんは、なるべく苦しまないように配慮すれば、呆けてしまったおじいさんを「シメ」ていいとおっしゃるんですか？　重度障碍者たちを「シメ」ていいとおっしゃるんですか？

愛華　いや、違う、――動物の話をしているんだけど？

弘樹　地続きの発想だと申し上げているんです！

愛華　そんなことといったって、――害獣の駆除とかだってあるんだし、［どうしたって出てくる肉は（あるわけじゃん？）

弘樹　［はいはいはい、その言葉がもう、ね。「害獣」とかじゃないんですよ、だから。

愛華　害獣は害獣でしょう？

弘樹　人間主観で見れば、――［ですね。

愛華　［そりゃ人間主観で見るでしょう！／や、こっちだって別に苦しませようと思ってやってるわけじゃないんだから＝

弘樹　＝しかし、結果として苦しむことがわかっているわけですよね？　苦しませることが目的ではないとしても苦しむ未来は見えている。つまり、――未必の故意があるわけです。じゃあ、なぜ、我々は、動物の幸せを踏みにじるような行為を続けてもいいんでしょうか？

愛華　（呆れつつ）動物の幸せ。

弘樹　そうです。なぜそういった残虐行為が許されるのか？　――許されるわけがないんです。問題の本質は要するにそこに、そういった倫理的、道徳的な水準にあるわけでして、

愛華　それはだから、人間は残虐な生き物だからだよ。っていうんじゃいけないわけ？

弘樹　もちろん、その理屈もひとつの事実ではあるでしょうね＝

愛華　＝でしょ？＝

弘樹　＝ええ、確かに、――人間は残虐な動物です。

愛華　じゃ、いいじゃん、もう、それで。

弘樹　しかし、そこまで開き直ってしまえばアニマル・ライツ云々の話ではなくて、すべての道徳が崩壊してしまいます。

愛華　なんでよ？

弘樹　人の嫌がることは止めましょう、人の痛みがわかるようになりましょう、と言っている人間たちが、なぜ、動物の苦痛を無視するのか？　人間だけを特別視する、その根拠はなんなのか？　――もちろん、なんの根拠もないわけです。単に人間は、人間という種を、ホモ・サピエンスという種族を差別的に優遇しているだけなんです。

愛華　あのさあ、――人間が、人間を中心にものを考えて何が悪いわけ？　しょうがねえだろ。人間が生き延びていくためには犠牲になっちまう動物もいるんだよ。［ごめんなさいね。

弘樹　［では、では、では、お聞きしますが、――愛華さんにとってどこまでが配慮すべき「人間」なんでしょうか？

愛華　な、なに？　どこまでが人間――？

弘樹　かつて人類は、長い長い期間にわたって、同じ人間を人間以下の存在として扱ってきました。ほんのつい最近まで、有色人種は奴隷として売り買いされ、すべての女性には選挙権が与えられず、同性愛者たちは病院に叩き込まれて「治療」を強制されてきた。いや、「つい最

近」ではないですね。――今でも。今でも、人間は「同じ人間」を人間以下のものとして扱って平気な顔をしている。そうです。ご承知の通り、私は非常に貧しい家庭で育ってきましたからね。愛華さんがご家族で可愛がっていたワンちゃん、――えーと、あれはボルゾイでしたかね？　私の家ではあのワンちゃんの一ヶ月分の食費にも満たない金額で、一家四人が半年食いつないでましたよ。そういう、少年時代でした。

間。

弘樹　動物は人間以下の存在なんだから多少は残虐に扱っても構わない、という発想。それは、成人の、白人の、健常者の、しかも、ある程度カネを持っている男たちだけが「人間」の名に値する、という発想と地続きです。要するにその発想は、女・子供や有色人種、貧乏人や病人、そして性的少数者・「変態」どもなんぞは、――人間以下の存在なのだから多少は、いや、かなり残虐に扱っても構わない、という発想と地続きなんですよ。キレイに繋がっているんです。

間。

愛華　じゃあ、こういうこと？　――動物の痛みを無視して、虐待して、殺して、その肉を食べておいしいねー、なんて言ってる人たちはみんなさ、なに？　他人を踏みにじって平然としている差別主義者で、犯罪者で、人殺しで、極悪非道なやつらだなあ、って、［そういうこと？

弘樹　［そうですそうです。そういうことなんです！　少なくとも、動物の痛みから目を背けている人たちのその目は、――虐げられた人々から目を背けている人たちと同じ目をしている、

愛華　くだらねえ話だな。

弘樹　そう、もちろん、くだらねえ話です。こんなものは。

愛華　ああ、――え？

一拍。

愛華　くだらねえ、って、あんたがそれを言うんだ？

弘樹　ええ、クソくだらねえ話ですよ。そして当然ながら、――クソくだらねえ人間である私はそんなことで心を痛めているわけじゃありません。そんな世代でもありませんしね。

愛華　ちょ、ちょっと待って、どういうこと？　――え？

弘樹　★まあ、まあ、最後まで聞いてください。――確かに、私にとってはくだらない理屈でも若い世代にとってはそうではありません。近頃じゃ、生まれてこの方・ガチ肉を一度も食べたことがない、という若者も増えてきていますから。そして、これからもそういう世代がどん

どん増えていくわけです。要するに、そういった古い感覚のままでは企業として絶対に生き残っていくことが出来ない、そんなわけで、今、大きな変化が必要とされているわけです。

一拍。

愛華　　んー、じゃあ、なに？　あんたは今の話をさ、ホントはくだらねえ理屈だなあ、と思って信じていないわけ？　で、その上で、その信じていない理屈に合わせて変化しろ、って、そういうことを言ってるの？

弘樹　　――そうすることによって我が社のイメージが良くなるんなら、必ずしも「くだらねえ」話ではないわけですよ。少なくとも、ビジネスの面ではくだらなくない。

愛華　　ああ、なに？　結局、あんたが心配してんのは要は金儲け、ってことなんだ？

弘樹　　仰るとおり！　要は金儲け、ってことなんです！　我々は金儲けのために、動物たちの幸せを願わなくてはいけない。この際我々の「本当の気持ち」なんてことはどうだっていい！　会社として何を発信しているか、その、イメージだけが問題です。

間。

愛華　　すげえな、あんた。逆になんか、

弘樹　　若い世代の中には昔の肉食文化の話を聞くと気分が悪くなってしまったり、あまりの残虐さに泣き出してしまう子も少なくありません。――そりゃそうでしょう。ブロイラーというニワトリの一生を人間に喩えれば、――保育園に通っているような小さな子供を狭苦しい檻に叩き込んで、閉じ込めて、立ち上がれないほどぶくぶくに太らせた挙げ句、「ああ、柔らかい肉ができた！」なんて言って出荷しているようなものなんですからね。「本当に酷い！」「どうしてこんな残虐行為が許されてきたのか全く理解が追いつかない！」当然、そういった感想を抱くでしょう。――まさか（私は）自分がそんな感性は持っているとはいいませんよ？　ですが、そういったことが事実として、あるわけです。これは認めないわけにはいかないでしょう。

愛華　　うーん。まあ、世代的に、そういうのがあんのかもしんないけどさ＝

弘樹　　＝ありがとうございます。そうなんです。事実として、残酷な会社からモノを買いたくない、残酷な会社で食事をしたくない、そう考えている人がいるわけです。しかも、大量に。これは、理屈じゃありません。感情です。あえて言えば、バカどもの直感です。そうなんです、だから大切なのは理屈じゃない。エビデンスじゃない。イメージです！　なぜなら、バカどもは直感的に嫌だ、と感じてしまった相手を決して信用しないからです。

間。

弘樹　　そういった観点からも、――やはり秀雄会長の発言は到底許容されない。我が社としてはそういった発言を絶対に許さない、という強い態度を示す必要があるわけです。しかも、秀

雄会長は今後ともガチ肉の店を続けるとおっしゃっているわけですから、我が社としてはもはや擁護することは不可能です。いかにそれが功績の大きい創業者といえども、です。

愛華　でも、――んー、謝らないと思うよ、じいちゃんは。

弘樹　謝らない？

愛華　だからまあ、さ。うん。（立ち上がり、少し移動して）いや、まあ、どうもどうも整理してくれて、ね。ありがとね＝

弘樹　＝いえいえ・そんな。

愛華　それはまあ、――理屈はわかったよ、だから。そういう、弘樹さんの言ってることもわかったけどさ。んー、思ってたより全然・冷静、というか、算盤ずくでしか考えてないみたいだから、むしろあたし的には諦めがついたけど・でも、――じいちゃんはそうはいかないと思うよ、って。

弘樹　謝罪など全く必要ありませんが。

愛華　んー、え？　そうなの？　いいんだ？

弘樹　ええ。結構です。謝罪していただかなくても、それは。

愛華　じゃあ、なに？　放っておいていいの、炎上？　謝らないでどうすんの？

弘樹　辞めていただきます。今後一切、グループとは関係を断っていただきます。

間。

愛華　納得しないとは思うけど、ね。え、辞表を出せってこと？　会長に？

弘樹　いえいえ。違います。辞表なんて出されても受け取れません。解任です。

愛華　解任？

弘樹　ええ。それが一番、企業としてはイメージがいい。

一拍。

愛華　そこまで開き直るわけ？

弘樹　愛華さんにご納得いただけるような言葉を選んでいるつもりですが。

愛華　なにそれ？　あたしの納得じゃなくて、あんたの信念でしゃべってよ。

弘樹　ありませんよ、そんなものは。

愛華　いや、ええ？　無いの、信念？

弘樹　そりゃ真心を込めて業績が上がるんだったら全力で込めますよ？　いくらでも込めますとも。だけど、――私の真心と業績の間に何か関係があるんですか？

愛華　（笑顔で）おめえさあ。あんまり舐めた口聞いてんじゃねえぞ？　この野郎。

心乃美　あー、はいはいはい！　今のはね、今のはどう考えても社長が悪かったと思う。全然、ダメだったと思う、弘樹さんが。

弘樹　いや、申し訳ありません本当に。ただ――、（立ち上がり）失礼ついでに私の考えていることを最後までお伝えさせていただきますと、――先程申し上げた解任に加えまして店名、

社名の変更、そして、我が社の沿革からも、歴史からも、秀雄会長に関する記述はすべて削除させていただきたい。まあ、言葉を選ばずに申せばですね、過去に遡ってすべての関係を根こそぎ断ち切りたい、そういうことです。

間。

愛華　妥協点もクソもないじゃん、そんなんじゃ。交渉の余地が一切ないよ。

弘樹　そのとおりです。交渉するつもりはこちらも一切ありません。

愛華　はあ？　じゃあ、え？　なんなのこの時間は？

弘樹　ご報告です。

間。

愛華　ちょっとあの、（煙草の仕草をして、移動しはじめる）

弘樹　どうぞどうぞ。建物の外に出ていただければどこなりと。

愛華、退場。

弘樹は着席し、心乃美は少し愛華を追うような素振りをするが、止める。

【2】弱肉強食

○ふたりきり

弘樹、水などを飲む。

心乃美　怖いってもう、――怖すぎだよ。

弘樹　いやあ、良くないですよね、あれは。

心乃美　揉めないでね、っていったのに。

弘樹　いや、揉めてないですよ。だって、揉め事っていう時には何か争点があるわけでしょう？　争点は無いですから。一方的な、ご報告です。

心乃美　怖いんだってだから。全然かわいくないよ！

弘樹　んー。確かに。かわいさは足りてなかったかもしれない。

心乃美　もっとかわいくやってよ！　（弘樹の傍に座り）って、え？　大丈夫なの、あんな言い方して？

弘樹　ええ。それはご安心ください。

心乃美　でも、――ええ？　ホントに？

弘樹　本当です。

心乃美　いや、だって、あんな言い方してたら、そりゃ、お姉ちゃんだっていい気分ではないだろうしさ、それでお姉ちゃんがおじいちゃんに伝えるわけだから、会社のことだっていろいろ発言権は残るわけじゃない？

弘樹　秀雄会長に？＝

心乃美　＝そうだよ！

弘樹　や・残りませんよ。解任ですから。

心乃美　そういう／経営には直接関わらないにしたって、株主ではあるわけでしょ？　だって、おじいちゃんは？

弘樹　心配ありません。それでも。

心乃美　――どうして？

弘樹、席を立ち、少し離れた場所へ。

弘樹　心乃美さん、結構、秀雄会長のことを誤解されてませんかね？

心乃美　誤解、ってなにが？

弘樹　自分の感情とか、意地とか、お気持ちとか、そんなくだらないところでビジネスやってる方じゃないですよ、会長は。

一拍。

弘樹　そもそも会長がガチ肉派だってことは私だってよく分かってます。心情としてはそりゃあ、ご自身がずっとガチ肉一本でやってきたわけですからね、それが一番大切でしょう。
心乃美　まあ、そう、ねえ。
弘樹　だからこそ培養肉に取り組んだお父様、直樹さんのやり方が気に食わなくて、まあ、結果としてグループから追放してしまったわけじゃないですか？
心乃美　（弘樹に近づき）それは、んー。まあ、簡単に言えばね、
弘樹　でも、会長は直樹さんを追い出しておきながら、彼の作ったレーベルはちゃんと残しておいたわけです。なぜか？　今後、培養肉焼肉がメイン・ストリームになっていく、っていう読みがちゃんとあったからです。で、結局、現在ではガチ肉の店・肉汁大百科の方を本社事業から切り離して、培養肉焼肉メインの方針をご自身で作られたわけじゃないですか？
心乃美　うーん。ちょ、ちょっとよくわかんないけど、ど、どうなる、っていう話？　なの？
弘樹　秀雄会長は私の提案の意味がわからない方じゃない、ということです。
心乃美　それじゃあ、受け入れるってこと？　さっきの、弘樹さんの提案を、全部？
弘樹　――結論としては、それしかないですから。そうなさると思います。

心乃美、元の位置に戻って座る。

弘樹　まだ会社に入ったばっかりのころ会長に言われましたもん。――生きるか死ぬかっていう考えでもまだ甘い。殺さなければ殺される、っていう、そんぐらいの覚悟で経営しなきゃ、会社なんかすぐ潰れちまうぞ、って。
心乃美　（鋭く）そんでなに、弘樹さんがおじいちゃんを殺すって、そういうお話？

間。

弘樹　――のんびりと余生を過ごしていただこう、と。そういうお話です。

一拍。

弘樹　ちょっと私も一服、（と言いながら立ち上がる。弘樹は非喫煙者だがコカインはやる）
心乃美　じゃ、じゃあ、あのさ、
弘樹　はい。
心乃美　結論が出ているのにわざわざお姉ちゃんとお話をした、っていうのはそれはさ、
弘樹　ええ。
心乃美　面と向かって、さっきみたいなその、――報告をしてやってるだけありがたいと思え、ってこと？
弘樹　――誰かが感謝するとかしないとか、そんなのは私が決めることじゃありません。

心乃美、弘樹から離れる。弘樹、少しだけ心乃美に近づき、

弘樹　うまく収めるよ。妥協点がないわけじゃない。

弘樹、退場。

心乃美も席を立ち、よろよろしつつ再び観客に向かって話し始める。

心乃美　無理だ。全然無理だこれは。

一拍。

心乃美　いや、これちょっと、信じてもらえないと思うんですけどね、もはや。――（弘樹は）いい人なんですよ。あの、ねえ。いい人なんですけど、まあ、でも、こういうことになってしまうともう、ね。――いや、冷静なんですよ。全然、感情的になっているわけじゃない。まあ、だからこそタチが悪いというか。ある意味、どうしようもないんですけど。

一拍。

心乃美　でも、いい人なんですよ、本当は。いや、本当に。心が広いところがある、というか。理解がある。そう、許容度がね、いろいろなことに対して大きいというか。私のあの、ゲーデルさんに対しての思いとかもずっと理解しくれてて。そうそう、そうなんですよ。――フィクトセクシャル、っていう、らしいんですけどね、私の、こういうの。この、ゲーデルさん、っていうのはあの、別にこの世に実在している人間、ということではなくて「キャラ」――なんですね。あたしの好きなフィクションの、異端プロディジーズ、っていう作品なんですけど、これは古今東西の異端の天才たちを美少年化してキャラにして、それで・その天才たちの脳力バトルを描いていく、っていう、アニメとか小説とかゲームとか舞台とか、いろいろメディア・ミックスで展開しているアレなんですけど、って、いや、違う！　ゲーデルさんがいかに尊いか、っていう話はじめちゃうとそれだけで朝が来ちゃうんで、また、それは別の機会に譲るとして、ですね。――だから、そう。まあ、そういうことへの理解もあって。

間。

心乃美　この時点では、結構自分なりに葛藤があったんですよ。なんかもっとあたしも間に入って、ちゃんと仲介する、っていうか、仲裁するっていうか、なんか、出来ることがあるんじゃないかな、って思ってたんで。――ご覧頂いたように、旦那・すごいよくしゃべるんで。別にあたしが黙ってても事が進んでいく、っていうのはわかっていたんですけど。でも、だから

○心乃美の独白　その２

こそ、黙っていることが卑怯なんじゃないか、とか。おじいちゃんのこともそうだし、私が黙っているのはお姉ちゃんに対しての裏切りなんじゃないか、とか。そういう思いもあったんですけど、でも、まあ、ね。反省はしているんですけど、実際は何も言わないんです、私は。

間。

心乃美　だって、――反省している人って反省していない人より偉いじゃないですか？　道徳的に優れているというか、――いい人じゃないですか？　しかも、反省している、っていっても責任とか取るつもりはないんで、一切。揉めるつもりもないですし。だから、――誰かを傷つけるつもりもないですけど、傷つけれられるつもりもない。別になに言われても反論する必要もないんです。だって、何も大切なものが無いんですから、この場所には。――だからやっぱり、どう考えても私が最強なんですよね。ズルいんですけど。ものすごくズルいんですけど、でも、そういうズルさを卒業するつもりもなくて。

一拍。

心乃美　なんか多分、――三人でいると一番・私、弱そうに見えるのかもしれないんですけど。実は、一番強いのは私で。っていうのは、創業者一族の血筋を引きつつ、現在の会社のメインストリームにも一番近い、っていう、そういう意味でも強いんですけど、それだけじゃなくて性格的に多分、私が一番強くて。

一拍。

心乃美　「弱い人が弱いままで尊重される社会」っていう、言葉が私、すごい好きで。初めてその言い回しを聞いた時に、ああ、いいなあ、って思って。弱い人が弱いままで尊重される社会。最高じゃないですか？　だって、私、弱い風にしているの結構、得意だし。何もしないでいても「あ、この人は弱い人なのかな？」って思われてきたから。これは結構、私の得意ジャンルだぞ、と思って。

一拍。

心乃美　だって、実際に誰が強いとか弱いとか、そんなの、本当のところはわからないじゃないですか？　たとえば、たとえば電車の中とかで・ですよ？　一日中、肉体労働をしてヘトヘトになっているおじさんとかが／その日に足とかケガしちゃったりして／そういう人が、でも、強がって、疲れていないフリをしていたら、――結構、その人って強そうに見えるじゃないですか？　そんで私は、――本当は家で一日中アニメばっかり見てて、本当はハイヤーとかで移動できるくせに「たまには電車でも乗ってみよっかな」とか思って同じ電車に乗って。そ

んで気分悪そうにしてヨロヨロしてたら、――私のが弱くみえるじゃないですか？　痛くもない足を引きずって歩くような女なんで、私。

一拍。

心乃美　（笑って）最悪ですよね。だから、反省はしてるんです。反省だけは。

愛華　ちょっといい？　心乃美。

心乃美　ああ、はいはい。ごめんなさい。ただいま（参ります）。

場面転換。

【3】毒を喰らわば皿まで

○納得いかない

三人、座っている。

愛華　ちょっと今、改めて会長とも電話で話してきたけどさ。

心乃美　ああ、さっきの、提案というか、を、伝えて？

愛華　そうそう。まあ、一応、ね。「解任」というお話もお伝えして。

心乃美　だ、大丈夫？　だった？　揉める、感じやっぱり？

愛華　いや、――なんか笑ってたけど。

心乃美　ああ。

弘樹　そうですか。

心乃美　じゃあ、まあ、ひとまずは――。え、笑ってたっていうのはそれは悪魔的な？　いい感じの笑いではなくて悪魔的なやつの方の？　（悪魔的に笑う）グウファファファ！　みたいな。

愛華　（明示的に咳払いをしてのち）まあ、じいちゃんのことはともかく。

弘樹　はい。

愛華、頭を抱える思い。会話を続けることに困難を感じつつ。

愛華　（心乃美に）というか、あんたよくこんなのと夫婦生活ってやってられるよね？

心乃美　え？　ああ、いや、それは別に。仲良くやってますんで。ね？

弘樹　ええ。仲良く。

愛華　前から聞いて見たかったんだけどさあ、――え？　あんたら、セックスとかは普通にしてるわけ？

心乃美　や、まあ、そうねえ。

愛華　や、こんな正面から聞くようなことじゃないのかもしれないけど。

心乃美　そうね。デリケートな話だから。

愛華　でも、子供とかもできないじゃん、ずっと？

弘樹　してますよ。定期的に。

愛華　ああ、そう。

弘樹　ええ。あ、――させて、いただいてます。

愛華　や、言葉使いとかはいいんだけど、や、だって、んー。そうなんだ？　でも、なに？言葉難しいけどふたりともあれでしょ？　ド変態というか？

弘樹　ド変態っていうわけじゃないですけど別に。

心乃美　普通だよ。［ねえ？

弘樹　そうだねえ。

愛華　［いやいやいや。あんたらが普通だったら、もう、ええ？　さずかに「普通」の概念ぶっ壊れすぎでしょう。
心乃美　――そうかな？
愛華　だって相変わらずあんたはアニメキャラみたいのが一番なわけでしょう？　ガチ恋っていうか、そんなん言い続けてるわけじゃない？
心乃美　それはね。一途なタイプだから私は。
愛華　まあ、まあ、――一途は結構なんだけど、そこで止まってちゃまずいでしょ、いい加減。せめて三次元には到達しようよ、結婚もしてんだしさ、っていう、
弘樹　愛華さんみたいにホイホイ離婚するのがいいとも思わない、ということじゃないですかね？　心乃美さんは。
心乃美　違う違う！　思ってないから、そんなこと。
弘樹　でもこないだ［そんなことを、
心乃美　［言ってないから！　言ったことないでしょ、そんな！
弘樹　や、――子供いるくせに離婚する人はわがまま、［みたいな、
心乃美　［全然！　もう、全然そんなこと思ってないし。言うわけないし。そんな失礼なこと。

愛華、移動して心乃美を見つめる。

心乃美　すごく酔っ払った時に、だから。一度だけ。
愛華　まだやってんの、弘樹さんはあの、女装癖、っていうの？
弘樹　ああ、女装ではないんですけど、まあ、はい。
心乃美　バ美肉、だからね、彼のは。
愛華　バ美肉。ああ、なんだっけ、あの、ね？　えーと、
心乃美　バーチャル美少女受肉。
愛華　うん。受肉。って、それはもう、どういう欲望なのか、あたしには欲望の形すら掴めないんだけどさ、
心乃美　え、わかるじゃん。だからバーチャル美少女になってみたいな、なりきりたいな、っていうさ。自分にはないものへの憧れ？　っていうかだから、サッカー選手になりたいな、とかと一緒じゃん。
愛華　おーん、一緒かな？
弘樹　いや、一緒ではないと思いますけどね、ただまあ、割りと近頃はメジャーな性癖だとは思いますけど。
心乃美　うん。メジャー、メジャー。
愛華　それ君らみたいな人たちの、ものすごい特殊な界隈の話じゃなくて？
心乃美　そんなことないって。
愛華　大体さ、バーチャル美少女になりたいとかいって白タイツ履いて被りもの装着してるような男と、どうやったらセックスにたどり着くのよ？

心乃美　や、別にそれは、
弘樹　ごく普通の感じでいたしてますけどね、それは。
心乃美　ねえ？
愛華　だってお互いに性的な、なに？　そういう性的な対象じゃないわけでしょ？
弘樹　（笑）対象ですよ、そりゃ。性的対象、っていうことと、愛情の対象とは別じゃないですか？
愛華　んー。別なのか？
弘樹　セッスクはセックス。愛情はまたそれとは別ですから。
愛華　や、おかしくない？　普通それ逆でしょ？
弘樹　逆？
愛華　だから、夫婦関係の中でセックスレスにはなってるけど、愛情はあるよ、みたいな。愛情があるから夫婦をやってるよ、っていう、さ？
弘樹　――愛の無いセックスが夫婦関係の中心にあってはいけないと？
愛華　や、まあ、いいけどね！　あんたらがそれでいいんなら。なんか常識を共有できないな、っていう話。
弘樹　それはこちらから見ても同じことが言えるわけですけどね。まあ、おそらくは我々の方が異端っていうことなんでしょうけど。
心乃美　異端。うん。異端だからね、うちらは。
弘樹　だから、あれじゃないですか？　美術部みたいなものですよ。
愛華　はあ？　美術部？
弘樹　我々はそれぞれ別の美意識を持って、全く別の美術作品に打ち込んでいる。だったら別々にやりゃいいじゃねえか、っていう人もいるでしょうけど、一緒に部活動したっていいわけじゃないですか？　繋がりがあったって、ねえ？
心乃美　そうそう。それはホント。そういうこと。
愛華　んー、いやでもさ、って、違うな。いや、ごめん、こんな話題に踏み込んでいったあたしがバカだった。ド変態のフィールドで勝負しても勝ち目がない。や、まあ、ね。いいや、もう、それは＝
弘樹　はい。
愛華　＝変態カップルの変態ぶりは、あたしの知ったことではない。
心乃美　そうそう。尊重し合う感じでね。人、それぞれ。

心乃美、弘樹を睨む。弘樹、心乃美、ふたりで急に笑う。

愛華　――な、なに？
弘樹　いや、ごめんなさい・ごめんなさい。なんでもないです。ちょっと、（笑顔で）ダメですよ愛華さんも。そういう、人のセックスを笑うもんじゃありませんて。
心乃美　（真顔で）そうだよね。

夫婦、さらに笑う。

愛華　なあんか納得いかねえんだよなあ。こんなド変態カップルが「正しい」顔してメイン・ストリートを歩いていて？　いや、それはいいとしてもさ、なんでそれで普通に焼肉してるだけのじいちゃんが「悪魔」みたいに言われんのか、っていうのがどうにもさあ。

弘樹　んー。じゃあ、どうしたら納得行く感じですかね？　愛華さんは。

心乃美　おお、すごくいい展開。（愛華に）どうしたら納得いく、感じですかね？

愛華　別になにしてほしいってわけじゃないけどさ。――まあ、どうせ炎上になった時からある程度のことは覚悟してたわけだし、

弘樹　ああ、そうですか？

愛華　そりゃ多少はね、会社としてもどうにかしないと収集つかないでしょ。だから、本社事業とじいちゃんが切れるっていうのは、それはそれでしょうがねえのかな、とは思ってるよ。

弘樹、無言で頷く。

愛華　ただ、さ。それはそれとして思うことはあるけどね。

弘樹　思うこと？

愛華　解任っていうのもさすがにどうなのかとは思うし、これまでのことを全部否定して、んー。だから、もうちょっと尊重してほしい、というか。まあ、だって、ガチ肉の時代が無かったらそもそも今は無いわけだからさ。真っ黒に塗りつぶすっていうんじゃなくてもうちょっと、なに？　報いる、っていうかさ。功労者なわけだからじいちゃんは。それなりの、扱いがあるでしょう？

間。

弘樹　お気持ちはまあ、わからないことは無いです。

愛華　――（んなわけねえだろ）ありがとう。ご理解いただいて。

弘樹　いえいえ。愛華さんのおっしゃってることはごもっともだと思いますよ本当に。だって、ねえ？　少し前までは普通だと思っていたことがある日突然、不道徳とか、「残虐非道」ってことにされてしまって。――自分はただ、今まで通りに暮らしているだけなのに「アップデートされていない」なんてことを言われてしまうわけですからね。これはなかなか、生きづらい世の中だとは思いますよ。

愛華　ホントだよ。そんでアップデートされた結果、ド変態カップルのみなさんが正義の味方です、みたいな顔をするわけでしょう？

弘樹　まあ、多様性ほど不愉快なものはありませんから。

愛華　へー？　そう？

弘樹　いや、思ってますよこれはホントに。

愛華　一番困るでしょ、あんたみたいのは多様性なくなったらさ、

弘樹　いや、私だってイライラしますから。シス・ジェンダーの素朴な異性愛主義者とか見るとやっぱり、ね。イライラします。認めたくはないものですよ、自分から見て、変だな、と思う人たちのことは。
愛華　んー、それはなに？　あたしのこといってるわけ？
弘樹　いいえ。そうじゃなくて。んー、――むしろ、愛華さんは心にも無いことを言わなさすぎるんじゃないですかね？　そんなに正直に生きてちゃあ、それは誰だって疲れちゃいますよ。
愛華　しょうがねえだろ？　あんたみたいに嘘八百で暮らせるほど器用じゃないんでね。
弘樹　いや、こんなのは慣れですよ、慣れ。愛華さんだってすぐに慣れますって。

○喰うか喰われるか

※ここでちょっと愛華が移動などするのかな？

愛華　さっきのは結局なに？　会社を乗っ取るっていうことを言ってるわけだよね？
弘樹　ん？　誰がですか？
愛華　や、だから、あんたと、心乃美とでさ。じいちゃんとあたし追い出して。
弘樹　まさかそんな。
心乃美　違うよ、［そういうことじゃなくて、
愛華　［でもさ・でもさ、――要するにそういうことじゃん。じいちゃんの影響力を全部排除するっていうことは、なんにも口出しさせないってことでしょ？　そしたら、結局弘樹さんの独裁というかさ、まあ、どうせ心乃美は会社のことなんて興味ないんだから要するにあんたのやりたい放題じゃん？
弘樹　そんなことは思っていませんよ、まったく。
愛華　（信じずに）じゃあ、なに、心乃美がなんかやるの？　実際に権力のある立場につくの？
弘樹　それならそれで構いませんし、心乃美さんがそれを望むならば＝
心乃美　＝うー・うー・うー、望みませんけどね、
弘樹　――本人がやりたいと仰れば、いつでも＝
愛華　＝都合のいいお嫁さんだよね、ホント、あんたにとっては。

一拍。

弘樹　そうかもしれません。多少なり、都合のいい相手とするもんですからね、結婚というものは。じゃなかったらすぐに破綻しちゃうじゃないですか？
愛華　おうおう、そこ突いてくるねえ。
弘樹　いや、愛華さんがどうとかじゃなくて、ただの一般論です。

愛華　だったらいいんですけど、べつに。あんたにもちょっとはさ、恩があるとかそういう感情はないわけ、じいちゃんに対して？
弘樹　それはもちろん、恩義を感じておりますけども、
愛華　恩義を感じて解任？　ならないでしょ、そういうことに普通は。誰があんたをそんだけの地位にしてくれたのよ？　学もない、コネもない、金もない、っていう無い無い尽くしのあんたを誰が可愛がってくれたのよ？　孫と見合いさせて結婚までさせて、挙げ句の果てには自分の息子追い出してまで後継がせてくれたのは誰でしたっけ、って話だよ。
弘樹　ですから、恩義を感じているっていってるじゃないですか？　ただ、恩義を感じているのは個人として、解任は経営上の判断です。それは、ちゃんと分けて考えてますから。
愛華　そこまでカッコつけるんなら政略結婚なんかしてんじゃねえよ。
弘樹　政略結婚を許したのは秀雄会長のご判断ですし、もちろん、心乃美さんと私との個人的な信頼関係で最後は決まったことですから。
心乃美　うん。それは、うん。別にあたしは、政略とか全然思ってないし、うん。

一拍。

弘樹　違うんですよ、だから。いや、これが今日、一番のご相談、というか、そう、一方的なご報告ではなくて、これはご相談なんですけどね、
愛華　なに？
弘樹　愛華さんを排除するとか、そんなことは本当に考えていないんですよ、私は。だからむしろ愛華さんが、新しい会長に就任していただく、というのはいかがでしょうか？

間。

愛華　ちょっとごめん。ド変態の考えていることはわかりづらくって、え？　どういう――？
弘樹　や、そのままですよ。先程、秀雄会長の「解任」ということをご提案させていただいたわけですけどね、それに伴ってむしろ愛華さんが、
愛華　え、は？　それでなに、あんたはどうするわけ？
弘樹　――できれば引き続き、社長として経営の指揮を取らせていただきたい。
愛華　あたしが会長になって、あんたの首切ったらどうするの？
弘樹　――なさらないと思いますよ、そんなことは。
愛華　わかんねえだろそんなこと。実際やったらどうすんだよ？
弘樹　んー、その上で秀雄会長に会社に戻ってきていただく、とか、そういうことですか？
愛華　知らねえけど。じゃあ、そうするって言ったらどうなるわけ？
弘樹　いや、だからできませんよ、愛華さんはそんなこと。
愛華　うん。できないよ。今は会長とかではないからね。でも、会長とかになっちゃったらそういうことができるようになっちゃうわけでしょう、っていってんの？
弘樹　そんなことしたって会社が潰れるだけです。

愛華　いや、わかんないでしょ、そんなの。
弘樹　わかりますよ。だって愛華さん、興味ないじゃないですか、経営に？　店舗の運営に興味はあっても会社の経営には全然、興味ないでしょう？
愛華　じいちゃんが戻ってくる、っていう可能性もあるわけじゃん？
弘樹　いいえ。――そもそも会長は培養肉をやりたくなくて、それで本社の経営からは手を引いたわけですから。戻ってくる理由がありません。
愛華　あんたの好き勝手にはさせない、という理由があるじゃない？　今のじいちゃんにはさ？
弘樹　だからこそ、愛華さんに会長になっていただいて、どうしてもおかしいと思ったらいつでも私のクビを切れる立場になっていただくのがいいんではないかな、と。

間。

弘樹　秀雄会長もわかっているはずです。この状況で会社の経営を取り仕切れるのは現時点では私だけです。
愛華　よく言うよ。そんな、何の信念もねえような人間に組織がまとめられるわけ？
弘樹　いや、ありますよ、信念。さっきはああ言いましたけど、
愛華　へー、じゃあ、どんな信念？
弘樹　――絶対に負けない、ということですかね。どんなことをしてでも絶対に生き残る。なるべく、筋が通っているようなフリをして。

一拍。

愛華　お金儲けのために筋が通っているフリをするわけね？
弘樹　もちろんです。勝たなければどうしようもないですから。正義も、意味も、事実でさえもすべて、勝った側の人間にだけ決定する権限があるわけですから。
愛華　フフフ。

一拍。

愛華　わかったよ。もう、あんたの勝ちでいいよ。それはもう、いいや。ホント。

一拍。

愛華　ただまあ、あんたからしたらくだらないことなのかもしれないけどさ。でも、うーん。いや、しょうがないよ？　解任でもいいよ、じゃあ。納得はしてないけどさ。納得はいかないけど、それが時代だっていうなら、受け入れるよ。それならそれでしょうがない。別にもう、

店名も、会社名も、全部無くなったって構わないよ。でも、なんか、なんらかの形で認めてやってほしいんだよ、じいちゃんのやってきたことを。じいちゃんのやってきた店を。

一拍。

愛華　だって、もうそんなに長く生きてるわけじゃあるまいしさ。いや、そんな湿っぽいことあの人は言わないけどさ。でも、自分のやってきたことが全部間違っていたなんて、そんな風にはあたしは言いたくないし、思ってほしくない。だって、じいちゃんが始めなかったからこの会社は無かったわけだからさ。ばあちゃんとふたりで、ずうっと店の看板守ってきたわけだからその人たちのやってきたことを、時代が変わったのか何なのか知らないけど、それを全部ひっくり返して、全部間違ってましたみたいに言うのはさ、それは、あたしにはできないよ。

一拍。

愛華　だからお願いだよ。頭下げるからさ。お願いします（頭を下げる）。なんか、もう、情けない話、どういう方法があるのかもあたしにはわかんないんだよ。だけど、じいちゃんが哀しんで、虚しい思いして死んでいくような形にはしたくないんだよ。そういう風にだけはなんないように、なんとか、してやってほしいんだよ。

間。

弘樹　（姿勢を正して）感動しました。

愛華　――（弘樹に近づきつつ）別にクサい芝居してるとかじゃなくて、本気で言ってんだよこっちは。

弘樹　いやあ、分かってます、分かってますよ。だから、感動しました、っていうのは、別に本当なんですけど、いや、すみません。そう、伝わらないのは私の人間性ゆえ、なんでしょうからね。

間。

弘樹　お電話、されてきたんですよね？　先程。

愛華　え？　ああ、うん。してきたけど。

弘樹　なんて仰ってました？　会長。

愛華　いや、なんてって、別に。

弘樹　笑ってらした、っていうお話でしたけど。何かおっしゃったわけでしょう？　解任とか、そういうこちらの提案に対しても、

愛華　――否定的なことは何もいってなかったよ。

弘樹　――そうですか。

愛華　うん。むしろなんか、――いいんじゃない、っていうか。褒めてたよ。これでいいって。予想通りだ、って。自分が経営者でもそうする、って言ってたよ。悔しいだろうにね。ホント。

弘樹　――（大いに喜んで）やっぱり新会長は愛華さんがやるべきですよ。

一拍。

弘樹　きっと秀雄会長も賛成してくれるはずです。グループには顔がいる。私みたいな人間はそういうことには向いていないんです。

愛華　ほどよくバカで、軽い神輿が欲しいって？

弘樹　仰るとおりです！　愛華さんは神輿として、本当にちょうどいい軽さであり、ちょうどいいバカさ加減です。

一拍。

愛華　もう、何周してんのかわかんないけど、なんか、すげえな、あんた。全然、一緒にいたいとかはまったく思わないし、むしろ、一秒でも早くあんたの前から立ち去りたいって気持ちでいっぱいだけど、まあ、ある意味ではすげえよ＝

弘樹　＝ありがとうございます。

愛華　もう、気持ち悪いもん。これにノータイムで返せるのがもう、気持ち悪い。

弘樹、一礼して退場。

場面転換。

【4】解除

○解除

同じ場所、姉妹二人きりである。

愛華　あんたもいいわけ？　さっきの、あの結論でさ、

心乃美　ん？　なにが？

愛華　や、だからあたしが会長になるっていうことでさ？

間。

心乃美　それが一番、――揉めないのであれば。

愛華　――煮え切らねえ返事だな、ホント。

心乃美　いいと思うよ。というか、やってくれるなら、ありがたい。

愛華　ああ、そう？

心乃美　だってそんな、大変なことだと思うから。名誉職だのなんだのっていったって、なんらかの責任は生じるわけだから。そういうことをやってもいい、って思えるのは、本当にお姉ちゃんの偉さだな、凄さだな、って思うから。

愛華　（笑）ちょっとは手伝ってくれるんでしょ、あんただって？

心乃美　それは、断る。

愛華　ちょっと！　――って、え？　マジでいってんの？

心乃美　マジ・マジ。それは断固、断ります。多分あの、これはホント多分なんだけど、

間。

心乃美　幸せを引き受けるのにも才能がいるんじゃない？

愛華　ごめん、――どういうこと？

心乃美　世の中には、不満を言っているのが満足な人もいてさ。炎上とかだってそうじゃん。あんなの、全然幸せになれないよ。怒ってても幸せになれない。――って、そんな簡単なことみんな分かってるはずなのに、ああいうことをするわけじゃん？　誰のためなのか、正義のためなのか・なんなのか、あたしには意味がわかんないけど、でも、怒りたくて怒ってるわけでしょう？　あの人たち。怒りたい、と思う人がいるわけじゃん？

愛華　うん。まあ、うーん。そうかもね。

心乃美　お姉ちゃんだってさ、――じいちゃんのためとかどこまで本気で言ってるのかわかんないけど、多分、本気なんだろうな、って思うけど、あたし的には、もう、全然わかんないから。そんな、――責任背負わされて？　そんなの全然、幸せじゃないじゃん。と、思うの。あたしは。

愛華　うーん。

心乃美　苦労がしたいんだよね？　お姉ちゃんは。苦労がしたくて、苦労するわけだから。それは才能だよ、もはや。

一拍。

心乃美　だから、お姉ちゃんには苦労をあげる。――怒りたい人たちには、怒る役をあげようと思う。だって怒りたいんだから、それで不満はないんじゃない？　多分。それであたしは、幸せを引き受けるから。

間。

愛華　まあ、いっかそれで。――あたしにもド変態夫婦の考えていることはまったくわかんねえしな。

ふたり笑う。ただし、笑い合っているわけではない。それぞれ、別の理由で、別の対象に向けて、たまたま同時的に、笑う。

心乃美、ジャンプをする。し続ける。

愛華　――なになに？　やめて気持ち悪い、なに、なんなの？

心乃美、ひたすらジャンプを繰り返す。

溶暗。

幕

【参考文献】

情況　2022春　特集・キャンセルカルチャー＋プーチンの戦争を止めろ！
「差別はいけない」とみんな言うけれど　綿野恵太
社会はなぜ左と右にわかれるのか　ジョナサン・ハイト
フェミニズムはみんなのもの　bell hooks
道徳の系譜　フリードリヒ・ニーチェ
カール・シュミット　ナチスと例外状況の政治学　蔭山宏
欲望会議　性とポリコレの哲学　二村ヒトシ　千葉雅也　柴田英里
21世紀の道徳　学問、功利主義、ジェンダー、幸福を考える　ベンジャミン・クリッツァー
善人ほど悪い奴はいない　ニーチェの人間学　中島義道
フリーターズフリー　vol.2
現代思想　202205　インターセクショナリティ
現代思想　202002　フェミニズムの現在
現代思想　「加害者」を考える　臨床・司法・倫理

現代思想ガイドブック　ジュディス・バトラー　サラ・サリー／竹村和子訳
ジェンダー・トラブル　ジュディス・バトラー
当事者は嘘をつく　小松原織香
ＬＧＢＴの不都合な真実　松浦大悟
図解入門よくわかる最新代替肉の基本と仕組み　齋藤勝裕
クリーンミート　培養肉が世界を変える　ポール・シャピロ
はじめての動物倫理学　田上孝一